

新 刊 紹 介

1. 上野国交替実録帳と古代社会
(同成社古代史選書 40) 前澤和之著
2. 中世武家領主の世界
——現地と文献・モノから探る—— 田中大喜編
3. 尋尊
(人物叢書 311) 安田次郎著
4. ある地方官吏の生涯——木簡が語る中国古代人の日常生活——
(京大人文研東方学叢書 9) 宮宅潔著
5. 古代ローマ人の危機管理
古代ローマ人の都市管理 堀賀貴編

前澤和之著

『上野国交替実録帳と古代社会』

(同成社古代史選書 40)

同成社 二〇二・一〇刊
A5 三五四頁 八〇〇円

「上野国交替実録帳」(以下、本史料)は、長元三年(一〇三〇)の国司交替に際して作成された不与解由状の草案である。そうした本史料の書誌学的検討や内容の解明に、『群馬県史』編集に挑むつて以来、ライフワークとして取り組んできたのが著者である。

本書は序章・第一部(一―四章)・二部(五―九章)・終章及び附載からなる。章立ては以下のとおりである。

序章 研究の道程と本書の目的

第一部 「上野国交替実録帳」の検討

第一章 「上野国交替実録帳」について

第二章 律令文書としての性格／第三章

内容と作成過程／第四章 「上野国交替実録帳」と地方政治

第二部 「上野国交替実録帳」にみる地

域社会 第五章 地域資料としての意義

第六章 国分二寺項と上野国分寺／第七章 定額寺項と放光寺／第八章 諸郡官舎項にみる郡家／第九章 諸郡官舎項と郡家遺跡

終章 「上野国交替実録帳」の今日的意義と今後の課題

附載 「国分二寺諸定額寺仏像経論資財雜具堂塔雑舎并府院諸郡官舎破損無実事」項 翻刻

序章では、著者が本史料を研究するに至った経過を顧みるとともに、本書の目的を、史料の性格を理解し、古代の地域社会の構造と特色、動向を明らかにするうえでどのような活用ができるかを示すことであると掲げる。第一部は、本史料の総論ともいべき部分で、史料の由来や作成年代、各項目の内容や作成過程など書誌学的特色、記載内容からみえる地方政治を論じている。第二部では、第一部を踏まえたうえで、関係史料と近年の発掘成果を用いながら、国分寺・定額寺・郡家の様相を検討している。終章では、今日の文化財行政においても本史料が多分に活用できるものであることを提言している。なお、序章と終章以外は全

て既発表であるが、いずれも大幅に改稿・補筆されているので、既に著者の論文に触れていても本書にて再読されたい。また、附載の史料翻刻も『群馬県史』を一部改訂しているので確認してほしい。

著者の論考は、群馬県内で報告されている遺跡の発掘成果や関係史料にも目を配り、本史料の記述と突き合わせながら丁寧に論じているところに大きな特色がある。また本書では、国司交替に際して作成された交替公文が「地域資料」として位置づけられ、史料の少ない古代地域史の研究を進めるうえで多大な可能性を秘めていることが説かれている。文化財担当者・博物館学芸員の立場から、幅広い分野で古代東国史研究を牽引してきた著者らしい視角だろう。

本史料が作成された時期は古代・中世転換期にあたり、地域社会の様態のみならず、地方支配・受領制度についても未だ明らかにされていない部分が多い。本書は当該期の研究に寄与する有益な一冊といえる。文献史を専攻する古代・中世史研究者はもちろんだが、考古学者、それに全国で寺院・郡家などの発掘調査に携わる自治体担当者

にも広く一読を勧めたい。

(高橋人夢)

田中大喜編

『中世武家領主の世界——現地と文

献・モノから探る——』

勉誠出版 二〇二一・八刊

A5 三六八頁 三八〇〇円

本書は、武家領主はなぜ地域社会に受け入れられ、そのコアとなりえたのかというテーマのもとで、文献史学・考古学・民俗学を専門領域とする一四名の研究者による論考を集めている。国立歴史民俗博物館の共同研究「中世日本の地域社会における武家領主支配の研究」の成果を公表するため、二〇一九年に島根県益田市で開催されたフォーラムの内容が各論考のもとになった

ているが、益田市で開催されたのは、同市の南西部、高津川流域に存在していた長野荘がこの共同研究の主要なフィールドであったためである。このため長野荘や高津川と益田川の河口域に形成された潟湖の港湾集落遺跡(沖手・中須東原・中須西原各遺

跡)に関する論考が多いが、列島内外の論考も含む多彩な内容となっている。以下では本書の構成に沿って内容を紹介するが、すべての論考に言及できるだけの紙数の余裕がないため、筆者の独断と偏見で特に印象に残った論考を中心に紹介したい。

第一部「武家領主の地域支配の諸相」では、まず長野荘に西遷した御家人が石見国に定着し、地域社会の中核を担うに至る経過・背景を考察する論考が並ぶ。特に渡邊浩貴氏は長野荘の在地領主が高津川の交通・権益にどのように関わっていたか、中世史料に加えてフィールド調査の成果を活用して考察している点が注目される。現地調査をもとに高津川の河関の場所を絞り込むことに成功しており、改めて現地を歩くことの重要性を認識した。

第一部には益田市だけでなく、九州・紀伊に関する論考も収録されているが、湯浅治久氏は肥前小城の寺院に伝わった如法經会に結縁した者を記す過去帳に、同地に西遷した千葉氏一族の名前が見えることから、彼らは現地の信仰を受容し、地域社会の一員として歩みだしたとする。武家領主が地

域社会に受容されるに当たり宗教の果たした役割が注目される。宗教と武家領主との関係について、石見でも考察を深める必要があるだろう。

第二部「地域の港湾と武家領主」は、港湾と武家領主の関係を考察する論考四本から成る。うち田中大喜氏が文献史学、鈴木康之氏が考古学の視覚で先述した高津川・益田川河口域に存在した三つの港湾集落の遺跡を、松田陸彦氏が民俗学の立場で高津川の中世河港をそれぞれ考察するが、いずれも地理的条件や後背地に規定された近隣の港湾どうしが相互に補充して、ひとつの「港湾圏」として機能していた可能性を指摘している。益田周辺に限らず、中世山陰地域の海上・河川交通を研究する上での重要な視点が提起されたと思う。

第三部「モノからみる武家領主」は、武家領主拠点で出土した考古遺物に関する論考四本から成る。村木二郎氏は益田市内の遺跡から出土した中世陶磁器を分析し、中世益田には恒常的に貿易陶磁器が運び込まれていたと結論している。従来の見解に修正を迫るが、地元の考古関係者の反応が待

たれる。ところで、益田の港湾遺跡の特徴の一つが朝鮮半島の熊川窯製の陶磁器が多く出土することだが、荒木和憲氏は、熊川窯で益田をはじめとする日本向けの陶磁器の生産が盛んになった原因を朝鮮王国の貢納制の変質に求めている。朝鮮王国での社会・経済情勢の変化が石見に影響を及ぼしていたことになり、西日本の武家領主が東アジア社会の動向と無縁ではなかったことを気付かされる。

以上、各論考を適切に紹介ができたが甚だ心許ないが、本書が益田を主要なフィールドとしつつも山陰ローカルな話題に終始するものではないことはおわかりいただけたと思う。中世武家領主を研究する上で示唆に富む内容に本書はあふれており、一読を奨めたい。

(倉恒康一)

安田次郎著

『尋尊』

(人物叢書 311)

吉川弘文館 二〇二・一〇刊
四六 三三〇頁 二三〇〇円

尋尊の日記「大乘院寺社雑事記」(以下、雑事記)の本格的な研究利用は、三浦周行「戦国時代の国民会議」(一九二二年)を嚆矢とする。雑事記は内閣記録課所蔵の原本に拠るほかなく、三浦は同課長の柳田国男から便宜を得て閲覧した。社会経済史研究の興隆をうけて関心が高まり、雑事記の翻刻刊行が始まったのは一九三一年のことだ。校訂を担ったのは、東京帝国大学史料編纂所に在籍した小野晃嗣・圭室諦成・中村吉治(三三年東北帝国大学に転出、かわって小坂浅吉が加入)・森末義彰の四人だが、開始時、最年長の圭室でさえ二九歳の少壮だった。雑説の手跡に向き合い、全一二冊(各平均五〇〇頁)を六年で完結させるといふ、質・量ともに驚異的な仕事である。この結果、尋尊は日本中世史を研究する者にとって極めて重要な人物になった。それから八

四年、初めて刊行された伝記が本書である。雑事記については鈴木良一「大乘院寺社雑事記―ある門閥僧侶の没落の記録」(そして、一九八三年)という著作がある。山城国一揆の研究から発した鈴木は、没落する莊園領主としての尋尊に迫った。公私の生活や、大和国内外の動静との関わりを描き、その思考法を読み解いた貴重な成果である。ただし今となつては、雑事記だけを読み込んだという限界が見えてくる。

この間、著者の安田次郎や稲葉伸道らの研究によって興福寺・大乘院の組織の解明は長足の進歩を遂げた。小泉宜右が校訂を担った「経覚私要鈔」が完結し、雑事記を始めとする国立公文書館所蔵大乘院本について紙背文書を含めた画像公開もすすみ、史料の利用環境が大きく改善された。かかる状況のもと著された本書は期待に違わぬ一冊になっている。その成果を一言で述べれば、雑事記を相対化して新たな尋尊像を示したことになる。

安田は長年にわたる熟読と関連史料の併読により、雑事記のなかの作為を読み取るに至った。門主の日記は先例の証跡として

提示されることがあり、尋尊は日記に操作を加えていた。ある興福寺僧は、「非儀を以て本となし、結句非例を以て後証となし、日記等に引き付け沙汰し置かる」と記して尋尊を非難する。

では、いかなる作為が明らかになるのか。鈴木は雑事記から前門主経覚との断絶を読み取った。だが、そこには経覚の負債の累が門跡に及ぶ事態を恐れての操作があり、実際の兩人の関係とは運庭があつた。「経覚私要鈔」をあわせて見ると、兩人の関係は師弟に他ならない。

雑事記に四九歳の誕生日に遺言を書いて封じたことが見えるが、内容は不明であつた。ところが、この遺言は三年後に廃棄されて雑事記の紙背文書になっていた。父一条兼良が二条家出身の政覚による大乘院門跡の相承を認めようとしなため、万が一に備えて政覚への譲与の意思を明確にしておくことに尋尊の意図があつた。父の意向に反する決意を秘匿して遺言を準備し、父の死で不要になった直後に廃棄したので。

尋尊は前代から次代への安定的な門跡の相承をはかるために心を砕き、日記の活用

もこの目的に沿うものだった。雑事記のなかの尋尊は隙を見せまいとして冷徹な姿になっている。俗な言い方をすれば、実際はもつと「いい人」だ、というのが雑事記の先に見えてきた尋尊像である。

もちろん雑事記を精読して矛盾を追究することでも作為は見出される。尋尊は門主としての権力を利用して寵童愛満丸を隸属的な状況から脱却させたが、雑事記にはそれを隠蔽するストーリーが記されているというのだ。そこを読み解くと、愛情深い尋尊の姿が見えてくる。

尋尊は「門跡繁昌」のための努力を雑事記に傾注した。安田は「経覚私要鈔」や雑事記の紙背文書も活用し、雑事記から知られた尋尊像を更新し、その努力を一層明確にした。そして、尋尊の努力は相応に報われたと結論している。尋尊は優れた伝記に恵まれた幸せ者だ、というのが評者の結論である。(末柄豊)

宮宅潔著

『ある地方官吏の生涯——木簡が語る中国古代人の日常生活——』

(京大人文研東方学叢書 9)

臨川書店 二〇二・七刊

四六 二五六頁 三〇〇〇円

本書は「睡虎地秦簡」が発見された墓の主とされる「喜」の人生を軸として、中国の古代人の生から死にいたるまでの日常生活を紹介するものである。秦の始皇帝と同時代を生きた末端の地方官吏で、歴史書に残されていない人物を、著者は出土文字史料に記された中国古代の制度や占いの記録などから、古代人独特の思想や信仰、情感といった観念を探り出そうとしており、そうした生活史への挑戦が九章にわたって展開されている。

まず第一章と第二章では、喜の誕生から、古代中国人の出生日時記録と吉凶、胎教、子に関する法律の規定、戸籍制度について語られる。そこでは戸籍制度が成熟し、より多くの者を徴発できるよう成人男性の年齢を申告させた結果、さまざまな基準が身

長から年齢へと切り替わったと分析を加えている。

第三章では喜の家族という視点から、中国古代の家族制度や土地・租税制度、郷里社会の様子について紹介される。簡牘史料には法律だけでなく、たとえば当時の家屋の姿や居住者の暮らしを彷彿とさせる史料もあり、祭祀による里内の結びつきにも言及されている。

第四章と第五章では喜の役人生活というテーマから、書記官の規定や地位、識字教育、地方行政制度や裁判制度について取り上げている。全体的に規定と実際とを絡めながら考察を深めており、詳細は本書に譲るが、たとえば裁判制度には役人に罰を与える冤罪予防策があるものの、それがかえって取調官が裁判を不当な判決へと導くこともあったとされる。

第六章は中国古代の婚姻制度について語られており、法律史料から妻の立場や夫婦関係の在り方の変遷を紹介している。

第七章と第八章は喜の従軍というテーマで、秦の軍事制度や兵士の日常、また従軍の後には爵位と財産の相続制度について語

られる。喜の軍隊生活を知る直接の手掛かりはないものの、嶽麓秦簡や「漢書」などから推測を交え分析されている。また始皇帝の巡行にも触れており、庶民にとつての「皇帝」が日常生活でも特別なものであったと指摘される。

第九章では病や葬送儀礼について紹介される。当時の寿命の規定から見ると平均寿命について述べたうえで、日書などから薬や健康法の紹介をしており、現代の中国医学の基礎がこの時代にはすでに出現している一方で、呪術療法も同じようにおこなわれていたと分析する。また古代中国人にとつての死とは地下世界への引越しであることを「擬制文書」を用いて紹介する。

本書において著者は現段階で確認できる出土文献史料を網羅的に整理し、多くのテーマで今後の研究の基盤となる骨組みをつくりあげた。どの章も興味深く、史料による論拠が丁寧に記されているだけでなく、先行研究や今後後学の者が参照すべき資料も紹介されている。本書はここからさらに生活史への関心が広がることを予感させる書であり、また今後ともこのような研

究を行っていく者にとって、道標となるだろう。

(荒見愛)

堀賀貴編

『古代ローマ人の危機管理』
『古代ローマ人の都市管理』

九州大学出版会 二〇二一・五、八刊
四六 二四二頁、二九八頁 各一八〇〇円

両書は、古代ローマ建築・都市史を専門とする堀賀貴氏の三〇年に亙るフィールド調査成果を、「危機管理」と「都市管理」のテーマに落とし込んで再構成し、関連諸分野の専門家が脇を固めるものである。

両書の概要、目次と著者は、それぞれ次の通り。

『危機管理』は「襲い来る様々なリスク（盗難・火災・洪水・疫病など）に対し、古代ローマの人々は、如何にマネジメント（事前対策・事後処理）したのか」を追跡（都市や建築）から論じている。はじめに（堀）／第一のリスク 盗難（堀）／トビック1 古代ローマの扉と鍵（エヴァン・ブラウド

フット）／トビック2 古代ローマの窓と窓ガラス（藤井慈子）／第二のリスク 火災（堀）／トビック3 古代ローマの建設現場（ジャンネット・ディレーン）／第三のリスク 洪水（堀）／第四のリスク 疫病（堀）／おわりに マネジメントの臨界点（堀）／エピローグ（堀）。

『都市管理』は「国家そのものであり、富を生み出す資産でもある都市を、古代ローマの人々は、如何に管理し、コントロールしたのか」を都市インフラ（上下水道、街道など）から論じている。はじめに 古代ローマ都市のリアル（堀）／第一章 都市のリスク管理（レイ・ローレンス）／第二章 ポンペイの都市構造再説（堀）／第三章 ポンペイの都市インフラ 下水道（堀）／トビック1 ポンペイ都市景観の不都合な真実（堀）／トビック2 古代ローマの折り 神が護る都市（ジャンネット・ディレーン）／第四章 ポンペイの交通と物流（堀）／トビック3 古代ローマの道路管理（佐々木健）／おわりに 都市の最期（堀）／エピローグ「術」としての都市・建築管理（堀）。

堀の武器はレーザースキヤニング測量（二秒間に数千点以上の点を三次元的に実測可能）から得られるビッグデータであり、詳細な現地実見調査に裏付けられて、ポンペイ、ヘルクラナム、オステリアを舞台に、三者三様の都市・建築から歴史が語られている。そのようなアプローチこそとりたてて珍しくはなくなっているが、それが「都市まるごと」となれば話が違ふ。例えば、首都ローマの外港であり、ティヴェレ川の河口にあつた都市オステティアでは、都市全体の微細な標高の変化を追うことで、地盤や街路、広場のかさ上げを把握し、洪水対策となるその「計画性」（洪水時でも街の機能の確保、安全が保障される高さの視覚化）が、そしてその一方で、個別対応としての場当たりきの結果（地盤面、住宅、店舗の床の高さのどここ）も、明らかにされている（『危機管理』）。場当たりきは、対策効果を薄れさせ、街全体の移転という「更新」にもつながっていく。ポンペイの排水（下水道）の実態も、遺跡全体の街路面の水平度の精密な評価（数cmの高低差の把握）によってこそ可能になっている（『都市管理』）。

ところで両書は、併せて、連続して読むことも肝要である。「都市管理」の第一章は、文献史料を用いて様々な都市の管理上の問題、すなわちリスク（洪水、火災、荒廃、都市化、金銭の不足など）とその対処も論じているので、「危機管理」と親和性が高く、補強してくれるし、そして、何よりも分析対象の都市は同じであるので、情報量が増え、理解が深まる。実際、読了後、ボンベイの印象はがらりと変わるであろう。現

在のボンベイは、古代のタイムカプセルとも称されるほど遺跡の残りがよく、遺跡公園としての整備も手伝い、秩序だつて、清潔で、それこそ当時「そのもの」と思わせるが、少なくとも後一世紀のボンベイは、治安が悪く、危険で、不便で、不潔極まりない街であつたのである。

堀の仕事は、国際的に高く評価されており、ボンベイ、ヘルクラネウム、オステイアでのさらなる調査研究に加え、ローマ遺

跡監督局の要請を受けたローマでのアウレリアヌス城壁の調査が始動している（二〇二〇―二〇二五年度国際共同研究強化（B）「新時代の「現場力」を活かした首都ローマを囲むアウレリアヌス城壁の国際共同調査・研究」）。両書は、都市の実態を知り、古代ローマ社会を理解するための基礎であるとともに、新たな成果への土台としても機能していくであろう。

（奥山広規）